

東洋學藝雜誌第三十號

○大陽ノ變色及ヒ日沒後西天赤色ヲ呈セシ原因

松井直吉

去年八月三十日ヨリ同九月二日ニ至リ烟霧甚シク大陽時  
 時黃赤色或ハ銅色ヲ帶ビタリ當時之ニ付キ種々ノ説明ア  
 リシト雖多分空氣中水分ノ過多ナルニ因ルナラント云フ  
 ニ決シタルガ如シ又十一月上旬ヨリ夕照甚シク十六七日  
 ニ至リ日沒後西天赤色ヲ呈セシヲ殊ニ甚シク漸ヤク一時  
 間余ヲ經テ消失シタリ時トシテ西方ノ火事ト見誤リシコ  
 アリシ程ナリキ十二月ニ至リテ稍薄ラキタリト雖猶ホ止  
 マス漸ヤク其下旬ニ至リ幾ンド止ム此赤色ハ日沒後ニ限  
 ラスシテ日出前ニモ屢發シタリ余ハ始メ是等ノ事ハ日本  
 及ヒ近傍ノ地ノミニ限ルコト思考セシニ爾後外國ノ新聞  
 雜誌等ヲ讀ミ之レニ類シタル現象ノ報道諸國ヨリ集リ今  
 ニ至テハ處トシテ幾ンドアラサリシコナキヲ知リタリ然  
 レ他ノ國ニテハ我國ニ於ケルガ如ク大陽銅色ヲ呈セス  
 シテ綠色或ハ青色ヲ呈シタリト大陰モ亦綠色或ハ青色ヲ  
 帶ビ甚タ奇觀ヲ呈シタリト云フ即チ次ニ此現象ヲ觀察シ

日も早く之と和譯して我邦人の參考に便と與へられむ事

て徒らに糊口に苦むと云ふ

(獨逸繪入新聞)

得ベカリシ地名ヲ時日ノ順序ニ從ツテ之ヲ記ス

八月廿八日	ロドリーク島	赤色
八月廿八日	シーシエル島	赤色
同	モーリチヤス島	赤色
同	東京	銅色
同	プラシル	赤色
九月一日	ゴールド、コースト	赤色
同	ヴェネズエラ	銀色或ハ青綠色
同	トリニダッド	赤色
同	パナマ	綠色
同	西班牙ノ一部	綠色
同	布哇	青色
同	錫蘭	綠色
同	オングール(印度)	綠色
同	マドラス(印度)	綠色

我邦ニテハ大陽ノ變色ト夕照ノ甚シキコトハ時日ニ一ケ  
 月餘ノ差違アリシガ故ニ相互ノ關係ナキガ如ク思ヒタレ  
 此印度地方ニテハ大抵同時ニ發シタリト云フ而シテ西天



ノ赤色ヲ呈セシトハ太陽ノ變色ノ如ク幾ンド熱帶ノ地ニ  
ノミ限ルヲナクシテ是等ノ地ヨリ漸次全地球ニ擴延シタ  
ルガ如シ即チ此現象ヲ始メテ見タル地名ヲ時日ノ順序ニ  
從ヒ左ニ舉ク

- 九月五日 布哇島
- 同 中旬 「オーストラリヤ」ノ南方
- 同 廿一日 喜望峯地方
- 十月八日 フロリダ(北米)
- 同 十三日 合衆國ノ南方
- 同 十四日 「カリフォルニア」ノ南方
- 十一月五日 東京
- 同 九日 英國
- 同 十日 「ミチソタ」(合衆國)
- 同 廿日 土耳其
- 同 廿一日 合衆國
- 同 廿五日 以太利
- 同 廿六日 佛蘭西
- 同 廿七日 合衆國東州

同 廿八日 獨乙

右ニ舉ケタル各所ニテ觀察シタル現象ハ其詳細ニ至リテ  
多少ノ差違アリト雖略ホ相類シ日没ノ頃或ハ其後西天一  
面ニ赤色、黃色或ハ綠色ヲ呈シ多少ノ時間ヲ經テ消失シ  
大ニ尋常ノ夕照ト異ナル所アリシト云フ此現象ヲ太陽ノ  
變色ト併セテ考フルニ大氣中外物ノ擴散シテ太陽ノ光線  
ヲ吸收スルニ由ラサルベカラズ而シテ此外物ハ非常ニ多  
量ノ水分カ宇宙間ニ散布スル<sup>ゴズミックハダスト</sup>塵カ若クハ火山ヨリ噴  
出シタル細微ノ灰燼カノ三物ニ出ザルベシ印度ニテミシ  
「スミス氏」が分光鏡ニ用井テ赤光ヲ驗セシ成果ニ由レ  
バ「スペクトラム」中雨帶ト名ケ水蒸氣ノ吸收ニ由テ生ス  
ル暗帶アツテ赤光ハ全ク水分ニ原因スルガ如シト雖如何  
セン英米ノ兩國ニテノ觀察ニ由レバ前ニ記シタル暗帶ハ  
甚タ薄ク却テ大氣ノ乾燥ナルヲ確定セリト云フ今假ニ  
此ノ如キ現象ヲ生スベキ程ノ水分アリトセバ早晚カ地上  
ニ降下セサルベカラス然レモ客年來未タ何地ニテモ非常  
ノ大雨アリシヲ聞カズ然レバ他ノ二說中其一ヲ採ラサ  
ルベカラサルヲ明瞭ナリ而シテ今茲ニ噴火山灰燼說ヲ信

スベキ理由アリ是レ他ナシ去年八月二十六日爪哇近海ク

ヤノ西方ニ在ルアシポルトン河ヲ下リ廿九日ノ夜其西



スベキ理由アリ是レ他ナシ去年八月二十六日爪哇近海ク  
 ラカトア島噴火山ノ破裂ナリ左ニ此變動ノ概略ヲ述ベ  
 クラカトアハ瓜哇トスマトラノ間ニ位セル小島ニシテ去  
 年五月以來屢々灰燼ヲ噴出シ激動ノ状態ヲ呈セシガ八月  
 廿六日ノ午後ヨリ同廿七日ノ朝ニ至リ甚シク爆響ヲ發シ  
 且灰燼及ビ泥土ヲ噴出シテ以テ其近傍ノ地ヲ覆ヒ終ニ該  
 島ノ過半ヲ海底ニ沈没シ其東北ニ方リ新ニ生シタル十六  
 箇ノ噴火山ヲ以テ之レニ代ヘタリ此大變動ニ因リ瓜哇ノ  
 西岸ハ廿七日午前七時頃高サ丈餘ノ大浪ヲ被リアンヂヤ  
 | デリンケン及ビメラックノ三村ハ幾ンド全ク洗ヒ流サ  
 レ死人ハ萬ヲ以テ數フトスマトラノ南岸モ亦大浪及ビ灰  
 燼ノ爲多少ノ損害ヲ受ケ現ニテロック、ベトンクト云フ所  
 ハ其痕跡ノミチ存スト而シテ其南ニ方ルランボン灣ニテ  
 ハ浮石海面ヲ覆ヒ丈余ノ層ヲナシ航海スルヲ得サラシム  
 ルト云フ又此變ニ關シ驚クベキコト一ハ灰燼及ビ爆響ノ  
 遠方ニ達セシナリ英船「アラベラ」號ハ八月廿八日ノ朝印  
 度洋中瓜哇ノ西北九百七十「マイル」ノ所ニテ土砂ノ如キ  
 モノ、降下ルニ會シタリト又「ミ―ダ」號ハオ―ストラリ

ヤノ西方ニ在ルアシポルトン河ヲ下リ廿九日ノ夜其西  
 岸ニ沿フテ航海シタルトキ灰燼ヲ被ル「一」インチ「計ナ  
 リシト實ニ此所ハスンダ海峽ヲ距ル「一」千〇五十「マイ  
 ル」計ナリ又ポルス（オ―ストラリヤノ西方ニアリ）コテ  
 ハ遠方ニテ大砲ヲ發スルニ似タル音響ヲ聞キタリト云フ  
 氷波ハ廿七日太平洋ヲ横キリ米國西岸及ビ東岸ニ達シ遂  
 ニ歐羅巴ノ海岸ニ着シタリ我海岸ニテモ亦之ヲ感シタル  
 コハ地理局氣象臺ノ報告ヲ見テ知ルベシ  
 斯ノ如キ大變象ナレバクラカトアノ噴出シタル灰塵ハ空  
 氣ノ上層ニ昇リ四方ニ散布セシコト疑ナシト雖尙ホ其歐羅  
 巴迄擴カリタル證ヲ舉ゲン十二月十三日和蘭ノワゲニン  
 ガンニ於テ大雨降リシガ其乾キタル跡ニ白灰ノ如キモノ  
 殘レリベイリング及ビツァンクダムノ兩氏ハ之ヲ集メ顯  
 微鏡ヲ以テ之ヲ檢シタルニ砂粒ハ稍小ナレ其質ニ至テ  
 ハクラカトア近傍ニ降りシ灰燼ニ異ナルコトナシト又マク  
 ファルソン氏ハ十二月七日西班牙ノマドリッドニテ降りシ雪  
 中細粉ヲ發見シ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢シタルニ電氣石磁鉄  
 石等ノ如キ其近傍ニアルモノ、外「ハイボルシ―ン」ヲ檢



出シタリト而シテ此金石ハドブレー及ビレナールノ兩氏が先キニクラカトアノ灰中發見シタモノナリ英國ニテモ十二月十二日ノ雨ハ灰ヲ含ミシト云フ又我國ニテハ十月十三日札幌ニテ天色朦朧日月俱ニ赤色ヲ帶ビ時々灰燼ヲ降下セリト是レクラカトアノ灰燼ナルヤモ圖ルベカラス之ヲ採集シ顯微鏡ヲ以テ檢スレハ其然ルヤ否ヤヲ決定シ得ベキナリ

以上述フル所ニ由テ是ヲ觀レバ噴火山ノ灰燼ノ甚ク廣ク蔓延シタルノ毫モ疑ヲ容レスト雖之レニ關シ最モ不思議ナルハ此ノ如キ灰塵ノ數月間大氣ノ上層ニ懸在シテ地上ニ降下セサルナリヘルムホルツ氏ハ十一月三十日日没後半時間ヲ經テ現出シタル赤光ノ位置ヨリ之ヲ反射スル物体ノ高サハ大抵四十「マイル」ナリト計算セリ其高處ニアルヲ思フベシ然レモ假ニプリース氏ノ說ニ據リ灰燼ハ地球ト均シク陰性ノ電氣ヲ帶フトセバ其電氣ヲ失ハサル間ハ地球ニ拒斥セラレテ降下スルコトナカルベシ而シテクルックス氏ハ先キニ稀薄ナル大氣中ニテ物質ノ甚ク永ク電氣ヲ保存スルコトヲ証シタリ今四十「マイル」ノ高處ニ在

ル大氣ハ幾ント真空ニ近キコトヲ記憶セバ右ノ疑團ハ忽チ氷解スベシ

茲ニ筆ヲ闔カントスルニ際シ空氣中多量ノ灰燼アリテ太陽其色ヲ變セシ例ニ見當リシカバ之レヲ左ニ記シ以テ前論ヲ尙ホ確實ニセントスホヰンバル氏ハ千八百八十年南亞米利加ニテコトパキシ噴火山ノ破裂ヲ見タリ其有様ヲ聞クニ始メハ黑烟山上ニ直立シ其高サ二千丈ノ点ニテ直角ニ折レ太平洋ノ方向ヘ流レタリシガ暫アツテ北風起リ四方ニ散亂シ同氏ト太陽トノ間ニ來リシトキ太陽ハ綠色ヲ呈シサナガラ綠青ノ一點ノ如クナリシトソレヨリ血赤色煉瓦赤色ニ變シ終ニ鏽銅色及ビ黃銅色ヲ經テ原色ニ還リタリト而シテ其日正午頃(最初日色ノ變セシ時ヨリ五時間ノ後)ニ至リ極メテ細微ナル灰燼降來リシト云フ之ヲ讀ミ再ビ第一表ヲ閱スルニ太陽ノ變色ハ印度洋中ニテ始マリ西方ニテハ亞弗利加ヲ越ヘ南米ニ達シ又東方ニハ太平洋ヲ經テ南米ニ移リシガ如シ之ニ由テ是ヲ觀レバ其原因ナル灰燼ハクラカトアヨリ出テシヲ疑ヲ容レス然レモ去年十月十六日北米アラスカニ於テモ亦噴火山ノ破裂

セシコアリシト聞ケハ朝夕ニ赤色ヲ呈セシ灰燼ノ幾分か

て種々の意義あるもの實に多し例へを「強」の字の如きは



セシトアリシト聞ケハ朝夕ニ赤色ヲ呈セシ灰燼ノ幾分カ  
ハ(殊ニ十月十三日札幌ニ降りシモノ、如キハ)此地ヨリ  
來ラスト確言シ能ハザル所ナリ

○漢字と廢すべし (前號の續) 外山正一

(第一)假名ばかりを用ひんと云ふ説と非とする者の頼み  
て以て根據となし、假名者流を攻撃するは最も好き點な  
りと思ふものは、同音にて意義の違ふ語ハ漢字を用ひれ  
ば一々其區別ハ立つものなれども、漢字と廢して假名の  
みを用ひん時ハ何が何んだか全く混雜してしまふならん  
と云ふと是なり、殊に漢語には同音にして意義を異にす  
るもの多くあるが故に、漢語まじりの文章を假名のみを  
以て綴らん時は、全く何だか分らぬべくくなるなら  
んとは、是れ返對論者が最も堅固なる城の如くに思ふ所  
れ論なり、然れども余と以て見るに此論たる一を知て二  
を知らざる者の論なり、其故は(第一)同音異義の語を假  
名よて綴りて、區別が立たざる譯ならん、同一ハ字にて  
種々の意義ある漢字を以て綴りても、區別の立たざるを  
は同様にてあるべき筈なり、今漢字とみるは同一の字に

て種々の意義あるもの實に多し例へて「強」の字の如きは  
「ツヨシ」「スコヤカ」「ツトム」「シイテ」等の意義あり「露」  
の字の如きは「ツユ」「アラハル」等の意義あり、「朔」の字  
の如きは「ツイタチ」「ハジメ」「キタ」等の意義あり、「行」  
の字の如きは「クダリ」「ツラナル」「チコナヒ」「ユク」等の  
意義あり「經」の字の如きは「フル」「ツ子」「タテ」「ノリ」  
「クビル」、「マツチ」「タテスヂ」「ヲサム」「イトナム」「ハ  
カル」等の意義あり、其他枚舉ふいとまゝならず、英語の如  
きも同音の語よめて種々の意義あるもの甚だ多し、例へ  
ば同じく「フライ」と云ふ語にして「飛ぶ」「ハレツスル」  
「コゲワシル」「アゲル、紙鷲杯を」「乗ル車ノ一種」「輪ノ一  
種」「旗ノ一部」「蠅」「磁石ノ一部」「印刷機ノ一種」等の意  
義あり、同じく「フート」と云ふ語にして「足」「寸尺ノ名」  
「歩兵」「詩ノ行ノ一部分」「オドル」「アユム」「基礎」「足ニ  
テトル」「フム」「ケル」等の意義あり、同じく「ハンダ」と云  
ふ語にして「ツルス」「クビククル」「カンガヘル」「ナガビ  
ク」「ヨリスガル」等の意義あり、其他同音同綴の語にして  
夥多の意義あるもの枚舉にいとまゝならず、實に英語にハ



唯一の意義れみの語は甚だ妙なし、斯く英語には同音にして、夥多の意義ある語の多きが故に假名嫌の人の考に従へを、英人も竟又は羅馬字を廢して漢字と出掛くべき譯なり、併し今日までは英人が斯の如き氣ちがひになりたるとは、余に於て聞のざる所なり、好しや英人が羅馬字と廢して、漢字と用ふるとあるも、實は少しも益はあらざるならん、何んとなれば既に前に陳べたる如く漢字にも同字にて種々の意義あるもの夥多あるが故に英人が羅馬字を廢して漢字と用ふると雖もつまり五十歩百歩どころではなく五十歩五十歩で、彼にて區別の立たざる論ならば此でも區別は立たざる筈なり、(第二)日本語には同音にて意義の異なるもの多きが故に、假名のみを用ひては區別が立たなくなると云ふなら、日本人此談話が互に分るは如何なる譯なるぞ、假名では分らぬと云ふ人達ハ、日本人の談話ハ分らぬから皆啞者になりて、漢字と以て筆談と出掛くべき筈なり、支那人の談話は日本人の談話よりも尙は分らざる筈なり、支那人は決して口をきくべからざる者なり、漢字と云ふ最と結構なるもれがあるとなれ

ば、支那人の爲には何もかも皆筆談でやるのが至極便利であるならんに、日本人も支那人も啞者と出掛て筆談と爲さるは何かそこに不便なることがあると思はる、なり、論者は同綴の語でも話ならば分れども假名で書ては分らぬなり、何んとなれば同綴の語でも意義を異にするものハ話ならば音節若くは調子に異同ありて、一々すく區別は立てども、假名で書てハ斯の如き區別ハ全くなくなるが故に實に混亂を極はむるならんと云はんが、余を以て見るに話にても全く同音のものにして意義の異なる言語決して妙なからざるなり、彼の「橋」と「箸」の如きは東京杯に於ては全く區別なきにあらぬども「橋」と「端」に至りては少しも區別なきが如し、又「蜂」と「八」と「鉢」とは共に「ハチ」なり、口にて「ハチ」とのみ云はんには「蜂」のとだか「八」のとだか「鉢」のとだか少しも分らぬども、それでも話ハ分るなり、英語の如きも亦然り特に綴れ同じきのみならず音節より調子に至るまで全く異同なきも其數妙ならず、前よ云ひふる「フート」の如き種々の意義ハあれども、其音勢に至りてハ少しも異同あるなし

又「マーチ」の如き「三月」と云ふ義の時も「進ム」と云ふ義

「タコ」をあけてある「こんにちハ、さかあやハ「タコ」の、



ざる者なり、漢字と云ふ最と結構なるもれがあるとなれ

意義のあれども、其音勢に至りてハ少しも異同あるなし

又「マーチ」の如き「三月」と云ふ義の時も「進ム」と云ふ義の時も其音勢は全く同一なり、又「メイ」<sup>may</sup>と云ふ語の如き「五日」と云ふ義の時も助動詞の時も全く同音なり、其他斯の如きもの枚舉に違あらず然れども話の中に斯の如き語を用ふるとは多くあれども、間違の出来るとは至て尠なし、其の話でよく區別の立つは全く前後の關係の爲なり、而て前後の關係よ由て區別の立つ理は話でも假名書でも少しも異同のあらざるなり、蓋し漢字と雖も前後の關係にするにあらずんば區別の立たざるもの夥多あり、唯一字「行」の字を書きて「ユク」と云ふとたか「オコナヒ」と云ふとだか當て見ると云はれたら、如何に假名嫌の者と雖も定めし困るならん「省」の字を一字書きた、ばかりでは「ツカサ」と云ふとだか「カヘリミル」と云ふとだか決して分らぬならん、假名者流がたは「タユ」「タコ」「タユ」と書きたらんには、成る程如何なる「タコ」のとだか少しも分らぬと雖も文章の中にあらんには假令假名文にもせよ、前後の關係よ由て「タコ」と「タユ」と「タコ」とは一々區別の立つものなり、即ち「かぜが、よいから、こどもが、

「タコ」をあげてゐる」「こんにちの、さかあやよ」「タコ」の、たくさんあるから、ばんの、そうざいは、いも」「タコ」にでもするがよい」「こんにちは、ぢぎやうにつき、しことしが「タコ」をもつてまいりました」と假名にて書てあつても決して間違は出来ざるならん、如何に假名嫌の先生と雖も子供があげる「タコ」と魚屋よ賣て居る「タコ」と仕事師が地形をする爲よ用ふる「タコ」と混同する恐のあらざるならん（第二）假名にては漢字の如くにすらくと書くとは出来ざるなりと假名嫌の者は云へり、然れども其人達が漢字はすらくと書けても、假名はすらくと書けぬは、決して一は漢字にして、一は假名なる故にハあらざるならん、全く漢字は幼少なる時より、常に書なれたるものなれども、假名よ至りてハ、それ程書きなれざる故ならん、漢字と雖も最初より、其人達にすらくと書けたるものよもあらざるならん、随分一畫一點毎よ考へく書きたる時もありたるならん、今でも中々すらくと書けぬ漢字も少しハあるならん、漢字を多く知らざるが故に常に假名のみにて書きなれたる者にハ假名のみにて中々すらく



く、と書くとの出来る者あり、婦人方の中にハ假名をす  
 らく、と書く者も随分いくらもある様に思はる、なり、  
 洋學者は皆覺のあるとなるが、横文字を初て書き習ひた  
 る時にハ、横文字ハ中々すらく、とは書けぬものよてあ  
 りき、初は横文字と云ふものハ決してすらく、とは書けぬ  
 ものならんと思へる計なりき、假名にてはすらく、と書  
 けぬと云ふ人ハ如きとそこで横文字は決してすらく、とは  
 書けぬものならんと云ふて、横文字は止めよせんとする  
 如き者ならん笑止の至と云ふべけれ、假名ハ纔に四  
 十八字なり、漢字ハ數萬あり、如何程假名嫌の者と雖も、  
 漢字を書習ふ程假名を書習ひたらんにハ、いくらでもす  
 らく、と書ける様に有るならん、

(第三)假名而已の文章ハ漢字まじりのもの、如くにすら  
 く、と讀めぬと云ふ者あり、是も前條同様に熟練にするも  
 のなり、漢文はすらく、と讀むとの出来るものにして、假  
 名文はすらく、とハ讀めぬものなりと云ふ如き理ハあら  
 ざるならん、讀みつけたらんにハ假名文と雖も必ずすら  
 く、と讀むとの出来るもれならん、漢文と雖も決して最初

よりすらく、とハ讀めぬものなり、假名嫌の人と雖も漢  
 文は云ふも更なり、漢字まじりの文章と雖もすらく、と  
 讀むとの出来る者なりと保證しがたき者も随分あるなら  
 ん、假名嫌の者の中にも漢字まじりの文章をうん、くと、  
 うなり乍ら讀む如き者も妙なりとせざるなり、假名文と  
 雖もなれさえすれば決して拾ひ讀よせずともすむものあり  
 其證據にハ「めし屋」「そをや」「せう屋」等の看版杯を拾  
 ひ讀にする者ハ多くはあらざるならん、假名嫌の者と雖  
 も空腸なる時に此等の看版を見たらんにハ決して拾ひ讀に  
 はなさざるならん、蓋し讀なれさえしたらんにハ假名而  
 己と以て綴りたる文章は皆此等の看版同様に一目瞭然と  
 讀み得べきものとなるならん、其證據には洋學者ハ皆覺  
 のあるとならんが最初洋書と讀み習ひたる頃ハ一語一  
 語に拾ひ讀になしたる而已ならず、一綴一綴に拾ひ讀に  
 なさねむならざりしなり、然れども次第に上達するに隨  
 ひて一綴一語に拾ひ讀にするに及むざる様になる而已な  
 らず一語一語に拾ひ讀にするにも及むざる様になるなり  
 特り一語一語に拾ひ讀にするに及むざる而已ならず、中

々長き文句と雖も一目して、すく其意を解し得るとの出

ならんと云ふ如き者往々あり實に言語に絶へたる論とこ



々長き文句と雖も一目して、すく其意を解し得るとの出  
 来る様に成る者なり、併し是ハ大ニ習ひ様によるものな  
 り、最初より常に變則讀ふ一つけたる者は、文意を解する  
 とは中々よく出来る者と雖も、兎角ぼつ／＼と返り乍拾  
 ひ讀にする僻のあるものなり、是に反して正則讀に一つ  
 けたる者の精きとは前の變則先生に及ばざるも、大意と  
 取り／＼讀むとは變則先生よりハ餘程達者にして、變則  
 先生がぼつ／＼一枚讀む間にはすら／＼と二枚も三枚も  
 讀み得るならん、漢學と雖も亦同様にてあるならん、堂々  
 たる漢學先生の中よて、洋學者が横文を讀む様にすら  
 くと漢文を讀み得る者將幾人ありや、假名文を讀みつ  
 けざる者に假名文がすら／＼と讀めぬからと云ふて、假  
 名文は決してすら／＼とは讀めぬものなりと云はん如きは  
 實に奇妙ある論法とこそ云ふべけれ  
 (第四)甚だしきに至りてハ漢字を廢し假名のみを以て文  
 章を綴るとにしても、たれにでも名文が書けると云ふ譯  
 にハ行のざるなり、矢張習はずには名文の書けざるなら  
 ん、されを假名のみを用ふるとしても格別益はあらぬ

ならんと云ふ如き者往々あり實に言語に絶へたる論とこ  
 そ云ふべけれ、論者の習ひぬを出來ぬとならば、如何程六  
 か／＼くても同じと思へるか、游は習ひぬを出來ぬもの  
 なり、故に論者の游は石を走よつて替古すべきものなり  
 と云はんとするか  
 (第五)假名にては文章が長くなり、紙のいるとが非常に  
 多くなるならん、漢字なれば一行に書き終り得べきもの  
 も、假名にて之を綴らんには、二行にも三行よもなるなら  
 ん、何んとなれを漢字なれを一字にてと足るべき所も假  
 名にては二字も三字も用ひぬをならぬもの多けれをなり  
 と云ふ者あり、一理なきにあらず、去年是又よく考へざる  
 者の論なり、成る程と「林」と書く代ふ「はやし」と書き  
 「男」と書く代ふ「ととこ」と書き「蛇」と書く代に「へび」と  
 書かんには、固より長くなるとは長くなれども、長くなり  
 ても決して仔細はあらぬなり、何んとなれば長くなりたる  
 代には、が狭くなりたれをなり、「林」「男」「蛇」の代に  
 「はやし」「ととこ」「へび」等と書かんにいたてに紙のいる  
 との増したるにもせよ、横に紙のいるとハへりたるなり、



又假名は漢字よりは餘程細くてもよきもれなり、漢字より餘程細くても讀むに不都合なし又餘程細くも書けるものなり、されば漢字の代に假名を用ひたれをとして、字の大きさと形次第まで、強ち漢字雜りの文よりは、假名而已のものゝ長くなると云ふ譯にもあらぬなり、

(第六)假名而已よて書くは漢字雜りにて書くより、筆數を多く動かさざるを得ざるなりと云ふ者あり、此論たる會員大槻氏れ既に十分駁せられたるもれなれば、今更此論に就て喋々すると要さざるなり、特にこゝに一言すべきは漢字を書習ふ程「いろは」四十八字を書習ひたらんには、假名の方が却て漢字よりも書きやすきに相違なからんとは既に前に陳べたる如くなるが、文字の性質より考へても假名の漢字程力を費さずして書き得べきものなり凡そ何の運動に限らず、單一なる運動は錯雜なる運動より爲し易きものなり、同じ分量の運動でも錯雜なる運動は單一なる運動より骨の折れるものなり、同じ里程の路でも直くなるものを走り行くのは曲りくねりたる路と走り行くのより、はるかよらくならん、針目の數は同

じとでも眞直にぬうのと右へ左へ上へ下へとまがりくねりてぬうのとは眞直にぬう方が甚だらくならん、蓋し假名と數字書くのと漢字を一字書くのと同じ分量の運動ふても假名を書く方が、はるかよらくなつてあるならん、假名を書く爲に要する運動は重に上下の運動にて且つ甚だ單一なるものなれども、漢字を書く爲に要する運動は上へ下へ右へ左へ殊の外錯雜なるものあり、同じ筆數よても漢字を書く方が假名を書くよりは餘程骨の折れるもれなり、

○音響ヲ用ヒテ物ノ厚サヲ計ル法 村岡範爲馳

物ノ厚サヲ綿密ニ計ルニハ「ウェルニエー」コンパラートル」等ノ器ヲ用フ其種類甚タ多シト雖モ據ル所ノ理ハ乃チ一ナリ曰ク一方ニ至小ナル距離ノ差アレバ他方ニ至大ナル距離ノ差ヲ生スルノ裝置ヲ求ムル是ナリ而シテ裝置中距離ノ差ヲ生スヘキ兩成分ハ二個ノ尺度ナリ今余カ製セントスル所ノ厚サ計リハ距離ノ小差ヲ判斷スルニ音響ノ高低ヲ以テシ之ヲ比スルニ一個ノ粗造ナル尺度ヲ以テスルニアリ其法左ノ如シ



と走り行くのよりハ、はるかよらくならん、針目の數は同

スルニアリ其法左ノ如シ

第一圖「イロ」ナル鋼條ヲ「ニホ」ナル臺ニ押シ付ケ「ハ」ニ



ニ於テ固定シ指ヲ以テ「イ」ヲ彈スレハ一定ノ樂音ヲ發ス其一秒間ノ振動數ヲ $n$ ト名ツケ之ニ對スル鋼條ノ長サ「ハイ」ヲ $l$ ト名ツク今ホ「ロ」ト「ニホ」トノ間ニ或ル物体

(即チ厚サヲ計ルヘキ者)ヲ挾ミ再ヒ鋼條ヲ「ハ」ニ於テ固定シ「ハ」ノ位置ハ變セス之ヲ彈スレハ $n$ ナル振動數ノ樂音ヲ發ス之ニ對スル鋼條ノ長サ「ハイ」ヲ $l$ ト名ツク然ル $l$ ハ一端ヲ固定セル振動體ノ定則ニ從ヒ次ノ二式ヲ得

$$n_0 = c \cdot \frac{1}{l_0} \sqrt{\frac{1}{S}}$$

$$n = c \cdot \frac{1}{l} \sqrt{\frac{1}{S}}$$

式中 $c$ ハ固定ノ方ニ關スル常數ナリ $e$ ハ鋼條ノ厚サナリ $g$ ハ地球引力ノ常數ナリ $S$ ハ鋼條ノ彈性律ナリ $S$ ハ鋼條ノ比重ナリ今一定ノ鋼條「イロ」ヲ用フル $l$ ハ $l_0$ ト $l$ ノ外ハ皆常數ナリ故ニ前式ヲ約シテ

$$n_0 = c \cdot \frac{1}{l_0}$$

$$n = c \cdot \frac{1}{l}$$

或ハ

$$l_0 = c \cdot \frac{1}{n_0} \sqrt{\frac{1}{S}}$$

$$l = c \cdot \frac{1}{n} \sqrt{\frac{1}{S}}$$

(1)

ト書スヘシ今 $l$ ヨリ $l_0$ ヲ減スレハ物ノ厚サ $d$ ヲ得

$$l - l_0 = d = c \cdot \left( \frac{1}{n} - \frac{1}{n_0} \right) \sqrt{\frac{1}{S}} = \frac{c}{\sqrt{S}} \left( \frac{1}{n} - \frac{1}{n_0} \right)$$

又常數 $c$ ヲ現スニ $l_0$ 及ヒ $n_0$ ヲ以テスル $l$ ハ

$$l_0 = \frac{c}{n_0} \sqrt{\frac{1}{S}} \quad (2)$$

トナル此式ニ據リテ $d$ ヲ求メント欲セハ先ツ $l_0$ 及ヒ $n_0$ ヲ測定セサル可ラス其法 $l_0$ 及ヒ $n_0$ 發スル所ノ音響ヲ一絃琴ニ調和シテ絃線ノ長サヲ比スルニアリ其算法左ノ如シ

第二圖「イロ」ハ張リタル糸ニシテ其間ニ琴柱ヲ左右スヘシ $a_0$ ハ $n_0$ ニ對シ $a$ ハ $n$ ニ對スル糸ノ長サナリ然ル $l$ ハ絃線振動ノ定則ニ從ヒテ

$$a_0 : a = n : n_0$$

ノ比例ヲ生ス故ニ

$$n_0 = \frac{a n}{a_0}$$



ナリ之ヲ第二式中ノ  $n_0$  ニ代フレハ

$$d = \frac{l_0}{\sqrt{u_0}} (\sqrt{u} - \sqrt{u_0}) \dots (3)$$

ヲ得是レ  $d$  ナ算スルノ式ナリ  $l_0$  ハ器械ノ常數ニシテ隨

意ニ豫定スルヲ得ヘシ故ニ厚サヲ計ル時測定スヘキハ唯

$a$  ニアルナリ

右ハ理論上ノ計算ニシテ其實用ニ適スルヤ否ヲ知ラント

欲セハ先ツ  $a$  ヲ計ル誤リノ  $d$  ニ及フヲ幾何ナルヲ知ラサ

ル可ラス今  $a$  ノ誤リヲ  $f$  トシ  $d$  ノ誤リヲ  $F$  トスレハ

$$F = f \frac{dd}{da} = f \frac{d \left[ \frac{l_0}{\sqrt{u_0}} (\sqrt{u} - \sqrt{u_0}) \right]}{du}$$

$$F = - \frac{f l_0}{2 \sqrt{u_0 u}} \dots (4)$$

$f$  ノ大サヲ定メンカ爲メニ長サ六十「ミリメートル」許リ

ノ薄キ鋼條ヲ執リ之ヲ固定シテ  $l_0 = 1000$  mm トシ絃線ヲ張リ  $l_0$  ニ對

スル  $u_0 = 1000$  mm トナル様調音シ置キ更ニ鋼條ヲ他處ニ固

定シ之ニ對スル  $a$  ヲ測定スルヲ十回ニシテ左ノ數ヲ得タリ

$a$	$\delta$	$\delta^2$
1125	0	0
1121	-4	16
1120	-5	25
1127	+2	4
1125	0	0
1124	-1	1
1129	+4	16
1124	-1	1
1125	0	0
1130	+5	25

$M=1125,0 \quad S=88$

表中  $M$  ハ  $a$  ノ平均數即チ  $a$  ノ近實價ナリ  $\delta$  ハ  $M$  ト  $a$  トノ

差ナリ  $S$  ハ  $\delta^2$  ノ和ナリ若シ一測定ニ關スル誤リノ近實價

チ  $f_1$   $F_1$  ト名ツケ十測定ニ關スル者ヲ  $f_{10}$   $F_{10}$  ト名ツクルハ

左ノ價ヲ得

$$f_1 = \frac{2}{3} \sqrt{\frac{88}{9}} = \pm 2$$

$$F_1 = \pm \frac{1}{2} \sqrt{\frac{1}{1000 \cdot 1125}} = \pm \frac{1}{27}$$

$$f_{10} = \frac{f_1}{\sqrt{10}} = \pm \frac{1}{1.5}$$

$$F_{10} = \frac{F_1}{\sqrt{10}} = \pm \frac{1}{8.4}$$

右ハ  $a$  ヨリ生スル誤リナリ若シ  $a_0$  ヲ定ムル時ニモ同様ノ

誤リアリト見做セハ成績ノ誤リ  $F'_1$   $F'_{10}$  ハ左ノ如シ

$$F'_1 = \sqrt{2} \cdot F_1 = \sqrt{2} \cdot \left(\frac{1}{27}\right) = \pm \frac{1}{20}$$

$$F'_{10} = \sqrt{2} \cdot F_{10} = \sqrt{2} \cdot \left(\frac{1}{8.4}\right) = \pm \frac{1}{6.0}$$

然ラハ右ノ装置ヲ以テ物ノ厚サヲ計ルニ十回ノ測定ヲ爲

セハ「ミリメートル」ノ凡ソ五十分ノ一ヲ確定スルヲ得

ルナリ若シ  $l_0$  ヲ二十「ミリメートル」トセハ百分ノ一ヲ計

ルヘク又測定ノ度數ヲ増セハ綿密ノ度之ニ數倍スルヲ

得ヘシ

此厚サ計リノ他器ニ異ナル所左ノ如シ

第一他器ハ二個ノ細密ナル尺度ヲ要スレ此器ハ唯一個

の業にはあらざるへい、







いへども、是皆瑣格刺底と大抵時と同ふす、比太克羅と雖もこれより四五十年の古よ過ず、而して西洋の學者大概此輩を以て學問の元祖とする也、故に東西洋ともに學問の起り始の時は大に異れりとはいひ難し、然るに今日に至りては非常の差異を生ずるに至れり、東洋にては數學及び天文學のみ極て少々ながら知られたりといへども、物理學化學地質學動物學等凡て他の理學なるものは絶て興起する氣色なく、西洋諸國と交通を始てより纔に理學なるものあるを知らるのみにして、今日といへども理學を無益視して謗り罵るもの甚だ多きを見る、余は是を以て學問社會にあるもの尤も憂ふべき所と信するなり、理學の狀況は即ち斯の如し、今反て二千餘年前より起り居たる哲學の狀況を観るふ、孔老時代の哲學と僅々の進歩はありたりとするも十分に進歩したりとは決していひ難し、老莊派の學者は勉て老莊と稱揚し、徒に其説を主張して、儒教を誹謗するのみ、儒教派の學者は強て古來の儒教を唱へ、猥よ老莊佛の學派を誹るを以て職務とするのみ、并よ古來の教を満足執着して譬を好酒家の飲酒に溺れ、

好色子の色小溺るる、が如く爾り、偶新奇の説と出すものあるも、或は儒教の解し方と異にするか老莊の註釋と論ずるに外ならず儒者の孔子の言に於て疑念を起し、老莊家は老子莊子の言に於て疑念を起すが如き、此輩の決して爲ざる所にして、如何なるとも其先師の言は是なりと初より預察して、其理を論せず、事の疑はしきに逢へば、即ち孔子曰云々、老子曰云々、莊子曰云々を引て、以て其疑を斷ず、然れども何ぞ孔老莊の言ふ所誤謬よあらざるとを必とせんや、今日に至りても猶世間如此の輩多きに似たり、豈悲しからずや、予以爲く東洋よては尤も長ずる所文學よありと然ども我邦に如きは尙未だ一定の文法もなく、眞の我邦の文章は果して如何なるものなるやも未だ定らず、或は假名のみを用おんとし、或は眞片假名を用おんとし、假名のみを用おんとする者の中にも議論數多よ別れて、孰れか是孰れか非なるも未だ知り難きに至りては、余を以て之を観るに、英國に在てチャールサー以前ふ比すべしとなすなり、東洋にて學問の不完全なるを今茲ふ之を詳論すると甚難し、又假令詳論するとを得るも、

亦言ふに忍びざるものあり、且く其何の故にか東洋にあ

するを得、人も生るゝを得、國家も存するを得、政治



亦言ふに忍びざるものあり、且く其何の故にか東洋にありては學問此の如く振はざるを論せん、

第二節 右述し如く東洋の學問社會の狀形甚不完全且亂雜にして哀むべきを觀ては、苟も學問社會にあるもの誰か之を興作するを願はざらんや、然れども先づ茲に一の考ふべきとあり、凡そ物斯に結果あれば必ず斯に原因あり、今東洋學問社會如此可憐の形狀なる必ず原因ありて然るなり、今何故に此くの如きの有様ぞ如何して斯に至れるといふとを探討せずばあるべからず、

結果固より原因なくむばあるべからずと雖も、此原因たるや通常甚多くして、譬を我邦今の有様に立至りたるも或は山川風土の形狀人民の氣質外國との交際、國內相互の交通、日本古來の學問、西洋の學問、西南の役、朝鮮の亂、其他幾千萬といふ數と盡し難きの原因ありて然る事故に勿論今東洋學問社會振はずとて、此は原因彼は結果なりと判然斷言するをい決してなし難のとなり、且又一原因は必ず一結果を生ずるとは云難きとにして、例へば、太陽の熱ありて地球も全きとを得、植物も蕃殖し、動物も生活

するを得、人も生ることを得、國家も存するを得、政治もあり、雨も降り、風も吹き、地震もあり、物理學も作り、法律も起る等、其結果固り枚擧するよ違あらず、然れを一の原因と探り得たりとて、此のみを原因とし、彼のみを結果といひ難し、左れば東洋學問社會振はずとて、此を原因とし、彼を結果とするとい、容易なる業にあらざらず、

故に東洋學問社會の振はざるを論するにも、其原因と盡す能はず、又其一原因の致す所の結果を盡すともなし難し、余も今儒教を取て、茲に先其東洋學問社會に於ける影響と論ぜんとす、然れども儒教一つが此社會を影響せしにもあらず、又儒教の影響及ぼせし所、此社會に止るにもあらざるなり、固より土地の形勢、食物の良否、氣候の寒暖燥濕、動植物の人類に及ぼす所の力等も、東洋開化の問題にハ大なる勢力あると亦疑ふべからざるなり、東洋にて儒教を論ずるハ、猶西洋にて耶蘇教を論ずるが如く、古來の信心胸中に殘り存して偏見あるを免れ難しと雖も、純理と思ふ所にのみ依りて論ずる時は、偏見の區域を脱するに近かるべし、

并は古來の教は満足執着して譬を好酒家の飲酒に溺れ

茲ふ之を討論するに甚難し、又假令討論するを得るも



東洋學問の振はざる原因の尤著しきものを匡正して、後に稍善良なる結果と望むべし、然れども原因も一方よりして之を見れば、極めて有害なりと見ゆるにもせよ、他の方よりして之を観るときは甚有益なるとあれを、一結果にのみ就て原因を匡正するも、此匡正したるより他の猶一層の弊害ある結果を生ずるやも知るべからず、故に理論上より十分に之を討究して、精密に利と害とを算し以て匡正すべきや否を断定すべし、儒教に就て論ずるも亦然り、其利害得失を算定して、然る後之を可とも不可とも断定すべし、

第三節 今儒教と東洋學問社會との關係を論ずるには、儒教は如何なるものなるかと大略知すむをあるべからず、儒教は東洋に於て最大なる勢力を有せし哲學の一派にして、孔子を祖となす、故に其起原も亦尤遠し、孔子以前には一派を立る程の學はあらざりしなるべし、假令ありたりとするも今日に傳らざる故に之を論すべからず、老子ありといへども、古來議論も多くして孔子の前とは断言し難し、然れども孔子の學は孔子自ら種なくして起したる

にはあらず、孔子以前の堯舜禹湯文武周公の行ふて主義とする所と祖述して一派の學といたるのみ、老莊列の諸子の天地の道等を論ずれども、孔子の派即ち孟子韓子此如きに至りては、特に人道に止るのみ偶天道地道を論ずるとあるも、これ人道を説くがために論ずるものにして、主として天地を論ずるにはあらざるなり、孔子以爲く、人れ學ぶべきところのものは人道のみ、而して人道の仁を行ふの一事に止る、孝弟忠信義禮敬等の如きは皆仁の一部分のみと政治を爲も人道なり、故に政治も仁のみに本づく、故に政治の學道德の學と相混して分別すべからず、朱子の大學の序に曰く「其所以爲教、則又皆本之仁、君躬行心得之餘、不待求之民生日用彝倫之外」と此を以て孔子の教たる人道を説くも此にして、民生日用の事に外ならざるを觀るなり、又論語に「子夏曰、賢、賢易色、事父母、能竭其力、事君、能致其身、與朋友、交言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣」此子夏の言の學問の人文交際の外はあらず、故に未だ學問せずといふとも、人々交際の上に於て賢賢易色云々の行あるものは、既に學

問したると異なるなしといへるなるべし、然らば此言や學

於テモ亦以テ甚ダ貴重スベキモノナリト信ス況ンヤ



難し、然れども孔子の學は孔子自ら種なくして起したる

々交際の上に於て賢賢易色云々の行あるものは、既に學

問したると異なるなしといへるなるべし、然らば此言や學問は人道の外ならずとの主義を證するに足るものなり、論語固り儒教の主義とする所と載れるもの故に此言は孔子直に言ふものにはあらざれども、其主義とする所と違ふをなかるべし、又語に「孔子曰、攻<sub>二</sub>異端<sub>一</sub>、斯害也已」と故に孔子以爲く、人宜く人道を學ふべし、他に天道地道を論ずるものあれども、此を攻るは大に害ありといへるなるべし、朱子曰く「異端虛無寂滅之教、其高過<sub>二</sub>於大學<sub>一</sub>、而無<sub>レ</sub>實、其他權謀術數一切以就<sub>二</sub>功名<sub>一</sub>之說與<sub>二</sub>夫百家衆技之流<sub>一</sub>、所以感<sub>レ</sub>世誣<sub>レ</sub>民充<sub>二</sub>塞仁義<sub>一</sub>者、又紛然雜<sub>二</sub>出乎其間<sub>一</sub>、是蓋<sub>レ</sub>儒家此所謂異端にして充塞仁義是異端の害なるべし、其餘此主義を證すべきもの論語中にも猶あるべけれど、一々擧るに及ばざるべし、(以下次號)

○漆ノ説

吉田彦六郎

余カ友理學士吉田彦六郎氏ハ近頃本國々産ノ漆ニ就キ深ク研究セラル、所アリテ既ニ最緊要ナル結果ヲ得ラレタリ此ノ結果タルヤ單ニ我邦ニ於テ將來漆工業上ニ裨益スル所妙カラザル而已ナラズ理學社會ニ

於テモ亦以テ甚ダ貴重スベキモノナリト信ス況ンヤ我邦ノ如ク純正理學ノ研究ニ從事スルノ便利無クシテツノ艱難云フベカラザルノ場合ニ於テヨヤ今同氏ノ承諾ヲ得テ左ニツノ要領ヲ官報第百七拾三號ヨリ抜記スルニ當リ敢テ數言ヲ附スト云爾

櫻井鏡三識

抑<sub>レ</sub>漆ハ黝色ノ濃厚粘液ニシテ稍甘味ノ臭ヲ帶ヒ其ノ比重ハ一、〇〇二〇乃至一、〇二七九ナリ又顯微鏡ニ藉リテ之ヲ諦視スレハ細微ナル球形分子ノ晴色又ハ稍稀薄ナルモノアリテ更ニ褐色不透明ノ細微物ト親密ニ混和セル液躰ナルヲ徵知スヘシ

漆汁ノ分析成果ニ據レハ其主成分トナスヘキ物質四アリ曰ク水、護謨、含窒素物及一種特性ノ酸是ナリ但シ該酸ハ始メテ其ノ質ヲ闡明セシモノナルヲ以テ之ヲ漆酸ト創稱セリ今左ニ大和國吉野所産ノ上等漆汁ノ分析表ヲ示ス  
漆酸八五、一五 護謨三、一五 含窒素物二、二八 水及ヒ揮發物九、四二  
各成分ノ性質ニ就キテ左ニ略述ス可シ



第一漆酸 此ノ酸ハ褐色ノ粘液ニシテ漆汁固有ノ性質ヲ

具有シ「ベンジーン」酒精等ニハ容易ニ溶解ス其ノ比量ハ

攝氏二十三度ニ於テ正ニ〇、九八五一ナリトス又其ノ酒

精液ハ數多ノ金屬ニ由リテ特殊ノ反應ヲ呈ス乃鹽化黃金

醋酸「ユラニユマ」及硝酸銅ハ皆美麗ナル黑澱ヲ沈降シ第

二鹽化鐵ハ黑色鬆狀ノ沈澱ヲ發生シ獨其ノ醋酸鉛ニ由リ

テ成生スルモノハ稍淡黝色ニシテ鬆狀ナリトス又遊離ノ

「アルカリ」ヲ混和スレハ忽チ濃黑色ヲ發起シ殊ニ微量ノ曹

達ヲ調加スレハ酷ク美麗ニシテ彩澤アル黑液ヲ得可シ若

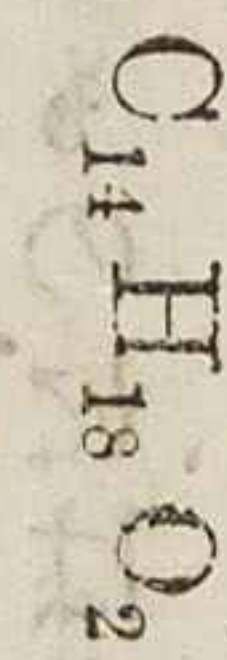
之ヲ塗抹料トシテ之ヲ應用セハ或ハ彼ノ蠟色漆ト稱シ鐵

鹽ヲ使用シテ製出スルモノニモ優レル所アル可シ

該酸ヲ分析セシニ其ノ平均成果ハ左ノ如シ

炭素七七、〇一 水素八、七五 酸素一四、二四

右分析上ノ數目ヨリ其ノ化學式ヲ算定スレハ左ノ如シ



又該酸ノ鉛鹽ノ平均成分ハ左ノ如シ

炭素五二、〇八 水素五、三四 鉛三二、四五 酸素一

〇、四五

右數目ヨリ算出セル式ハ  $(C_{14}H_{18}O_2)_2Pb$  ナリトス

又二種ノ鐵鹽ヲ製出セシニ其ノ質輕鬆ノ黑末ニシテ實ニ

酸化シ易キヲ徵セリ今左ニ其ノ分析ノ表ヲ示ス

炭素 七四、四一

水素 八、一六

鐵 二、〇七

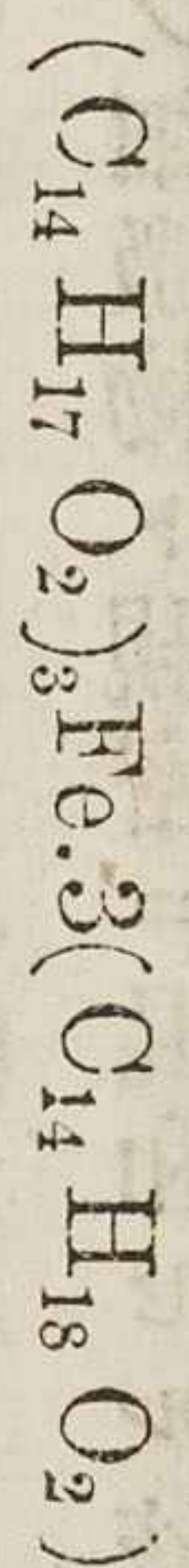
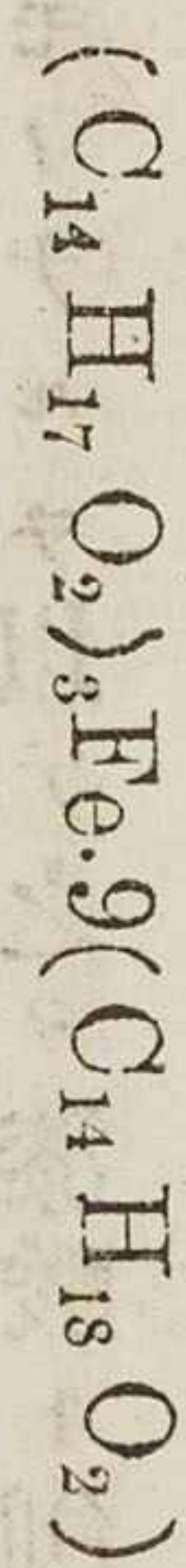
酸素 一五、三六

炭素 七四、五六

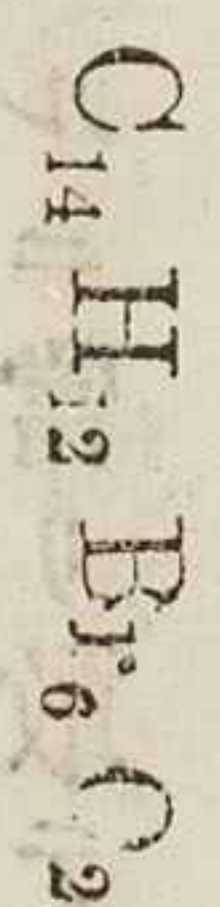
水素 八、一六

鐵 四、二九

酸素 一三、五九



漆液ニ臭素ヲ滴加スレハ劇烈ナル反應ヲ呈ス若シ其ノ過  
量ヲ用フレハ六臭素交換果成物ヲ構成ス其ノ式左ノ如シ



又漆酸ヲ石灰ト俱ニ蒸溜スレハ數多ノ同分異重ノ炭化水

素ヲ得ヘシ此等ノ物質ハ皆稀薄ノ油ニシテ其、沸點ハ攝

氏一百乃至二百十度ノ間ニ居リ其ノ成分ハ  $C_{14}H_{24}$  ノ式ニ

由テ現証シ得ヘキモノトス冷硫酸ヲ注加スレハ炭化シ空

氣ニ暴露スレハ酸素ヲ吸收シテ脂化ス可シ

酸素 五一、一三



氣ニ暴露スレハ酸素ヲ吸收シテ脂化ス可シ

強硝酸ヲ用テ漆酸ヲ處スレハ最初ハ窒素交換果成物ヲ發成スレモ漸次ニ變更シテ遂ニ一種ノ酸ヲ構成ス可シ但シ

其ノ含有スル酸素ノ原子ハ漆酸ニ比スレハ稍多シトス乃

其ノ鉄鹽ヲ析出シテ分析セシニ左ノ成果ヲ得タリ

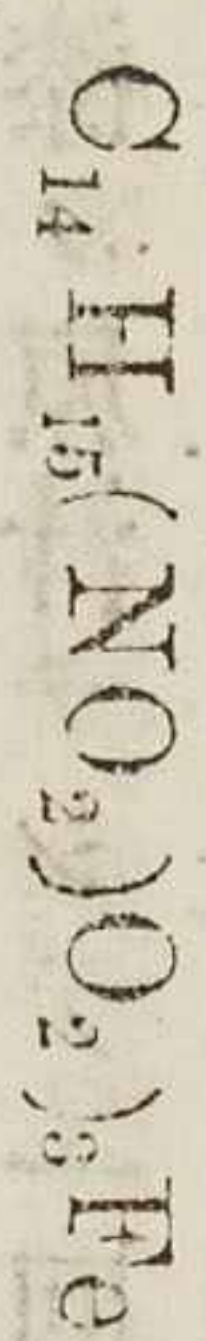
炭素 五一、四九

水素 四、八二

酸化窒素 五八、一六

鉄 九、七七

酸素 五、七六



又強鹽酸ヲ用テ漆酸ヲ處スレハ其ノ分子ノ變化ヲ發起シ

堅硬ニシテ黑色ノ物質ヲ成生ス但シ其ノ成分ハ毫モ其ノ

原質ナル漆酸ト異ナル所ナシトス

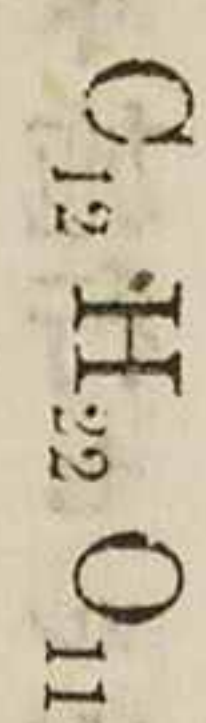
第二護謨 此ノ物ハ尋常ノ「アラビヤ」護謨ト異ナルコトナ

シ乃其ノ溶液ハ強キ粘着力ヲ有シ而シテ其ノ轉化セルモ

ノハ「フェリシ」液ヲ還元ス今左ニ其ノ成分ヲ示ス

炭素 四二、四七

水素 六、四〇



酸素 五一、一三

但シ其ノ灰分ハ些少ナレモ主トシテ礬土石灰苦土及加里ヲ含有ス

第三含窒素物 此ハ漆汁ヲ酒精ト熱湯ニ處スルノ後殘溜

スル所ノ不溶物トス此ノ物無臭無味ノ固形躰ニシテ稍暗

色ヲ帶ヒ冷水及稀薄ノ「アルカリ」液ニハ溶解シ易カラサ

ルナリ彼ノ漆ヲ空氣中ニ暴露シテ硬化スル所ノ顯像ハ全

ク該物質ノ作用ニ因ルコトハ數多ノ試驗ニ徴シテ確定セル

所ナリ

今左ニ其ノ分析表ヲ示ス

炭素 五九、六一 水素 七、六二 窒素 五、四八 酸

素 二六、〇八 灰 一、二〇

右數目ヨリ算定セル式ハ約ソ  $C_{12}H_{16}N_6O_{11}$  ニ適當ス又灰

中ニハ硫黃ト燐トノ痕跡ヲ檢出セリ

精純ノ漆酸若クハ其ノ護謨ト水トノ混和物ハ空氣中ニ暴

露スルモ依然トシテ變更スルコトナシト雖更ニ該含窒素物

ヲ調加スレハ恰モ天然ノ漆汁ト均シク硬化スルヲ見ル可

シ勿論空氣ノ溫度ト濕氣トノ増減ハ硬化ノ緩急ニ關スル



所多シトス今此ノ顯像ニ就キ施行セル實驗ニ據レハ漆汁ハ炭酸、水素及ヒ窒素等ノ氣中ニ在リテハ溫度ノ高低ト濕氣ノ多寡トニ關セス毫モ硬化スルコトナク依然トシテ其ノ固有ノ狀況ヲ變セサレモ若シ濕潤ナル酸素氣中ニ閉圍スレハ尋常ノ空氣中ニ放置セルモノヨリ硬化スルコト稍迅速ナリトス而シテ其ノ溫度ノ最適宜ナルハ攝氏二十度乃至二十七度ノ間ニ居レリ若夫此等ノ度數ヨリ或ハ昇上シ或ハ低下スルコト過大ナレハ遂ニ硬化スルコトナキニ至ル可シ蓋シ漆ノ硬化ニ於テ緊要ナル含窒素物ハ攝氏六十乃至六十五度ノ熱ニ上セハ凝結シテ最早其ノ漆酸ニ於ケル作用ヲ發起シ得サルモノナル可シ乃漆ノ原汁ヲシテ一回六十度以上ニ熱スルノ後ハ之ヲ何ノ氣中ニ閉圍スルモ更ニ硬化スルコトナシトス又冷却シテ五度以下ニ達スレハ均シク含窒素物ハ其ノ作用ヲ停止スレモ此ノ場合ニ於テハ更ニ微熱シテ二十度乃至二十七度ニ上セハ輒其ノ原狀ヲ回復シテ再硬化スルヲ見ル可シ

濕氣ノ分量モ亦漆ノ硬化ニ於テ大ニ關係スル所アリ乃溫度最適宜ニシテ攝氏二十度乃至二十七度ナルモ空氣若ク

ハ酸素ノ全ク乾燥ナルモノニ在リテハ決シテ硬化スルコトナシ之ニ反シ若シ此等ノ氣躰ニ濕氣ヲ飽充スルハ僅カニ一時間ヲ過キスシテ硬化シ了ルヲ見ル可シ

右試驗ノ成果タル業已ニ漆工カ經驗セル所ノ事實ト能ク符合スルモノトス即彼ノ梅雨ノ候ハ漆ノ塗工術ニ最適宜ナル時節ナリト言ヘル説ハ是其ノ空氣ノ溫度二十三乃至二十五度ニシテ且毎ニ濕氣ノ饒多ナルニ因リテ漆ノ硬化ヲ促進スルニ外ナラサルハ毫モ疑ヲ容ル可カラサルナリ漆ノ乾燥シテ硬化スルノ際更ニ發起スル所ノ變化ヲ究明セント欲シ漆汁中ノ水分ヲ驅逐スルモノト其ノ天然硬化シテ水分ヲ消失スルモノトヲ分析セリ其ノ成果ハ左ノ如シ

(甲) 無水漆

炭素七五、五四 水素八、九七 酸素一五、一七 窒素

〇、一一 灰分〇、二二

(乙) 硬化漆

炭素七〇、八五 水素八、二二 酸素二〇、五二 窒素

〇〇、九二 灰分〇、三二

右甲乙二表ノ數目ヲ對照スレハ漆汁ノ硬化スルヤ更ニ酸

即チ棕櫚類等ノ維管束是レナリ總テ有限維管束ヲ有スル







胞組織中ニ散布スト雖モ其漸ク長スルニ從ヒ其數増加シテ竟ニ中心ノ木髓ヲ圍繞シテ環別スルニ至ル然レモ細胞組織薄片ヲ成シテ尙維管束間ノ處々ニ存ス之ヲ射出木髓ト稱ス

右ノ如クナルガ故ニ一年間生長シタル尋常樹木ノ莖幹ヲ橫截スレバ其截面ハ外部ニ外皮層アリ其次ニ韌皮層アリ是レ環列セル維管束ノ外部ノ合同セルモノナリ其次ニ岡比安層アリ是レ亦維管束ノ同層相合同シタルモノナリ其次ニ木質層アリ是レ亦維管束ノ内部相合同シタルモノニシテ其處々ニ射出木髓ノ散布スルヲ見ル植物ノ木質環トハ則チ此ノ木質層ヲ謂フナリ而シテ莖幹ノ中心ニ木髓アリ  
上ニ述ル所甚々簡略ナレドモ植物莖幹ノ造構ハ實物ニ就キテ顯微鏡ヲ以テ檢スルニ非ザレバ到底之ヲ理會スルコト難キモノナレバ今此ニ冗長ノ文句ヲ掲載スルヲ要セス唯余ガ目的トスル所ハ植物ノ木質環ト云フ語ノ義ヲ略解セント欲スルニ在ルノミ  
木質環ハ樹木ノ種類ニ從テ其造構一様ナラズ例ヘハ附ニ

於テハ木纖維甚ダ細クシテ其壁膜厚シト雖モ木管ハ頗大ナリ黃楊ニ於テハ木纖維甚細ク木管モ亦甚ダ細クシテ其數僅少ナリ松柏科ノ樹木ニ於テハ木管甚少ナクシテ其木纖維ニ圓形ノ印アリ又松柏科中アラ、ギ屬ノ木纖維ハ圓形ノ印ト螺旋狀ノ細糸ヲ具ス  
温帶地方ニ於テ一年間生長シタル尋常樹木ノ莖ハ其木質環ノ數一層ナレモ第二年ニハ岡比安層ノ生長ニ依テ第二層ノ木質環ヲ生ス第三年ニハ其第三層ヲ生ス斯ノ如クシテ年々環數ヲ増加スルヲ通例トス是レ春夏間ハ植物盛ニ生長シテ新木質ヲ増加スト雖モ冬間ハ生長全ク止ムガ故ニ各年成ル所ノ木質環判然分別スルヲ以テナリ熱帶地方ニ於テハ各年ノ木質環分明ナルヲ得ス是レ此ノ地方ニ於テハ旱魃ノ氣候ニハ植物ノ生長稍々中止スルモ寒温兩帶地方ノ如ク全ク止ムコトナキガ故ナリ温帶地方ニテモ氣候ノ不順ヨリシテ春夏間ニ生長ノ暫ク中止スルコトアレバ一年間ニ數層ノ木質環ヲ生スルコトアリ熱帶地方ニ於テハ一年間ニ數層ヲ生スルコト多シ熱帶亞米利加ニハ毎月一環ヲ生スル樹木アリト聞ク又蘇鐵類ハ數年ニシテ一層ノ木質

環ヲ生シ仙人掌類ニハ多年生長スルモ唯一層ノ木質環ヲ

テ之ヲ見ルヲ得故ニ環ノ外部ノ組織緻密ナル處ト内部ノ



木質環ハ樹木ノ種類ニ從テ其造構一様ナラズ例ヘハ榲ニ

生スル樹木アリト聞ク又蘇鐵類ハ數年ニシテ一層ノ木質

環ヲ生シ仙人掌類ニハ多年生長スルモ唯一層ノ木質環ヲ有スルモノアリ此ノ二類ノ如キハ氣候ノ寒暖ニ關セス其固有ノ性質ニ依テ此ノ如クナルモノナリ

木質環ハ其厚サ各種樹木ニ於テ異ナリ速カニ生長シテ軟弱ナル木質ヲ有スル樹木ハ其環厚ク生長ノ遲緩ナル堅硬木質ヲ有スルモノハ其環薄シ又氣候ノ寒暖、日光ヲ受クルノ多少、滋養物ヲ吸收スルノ多寡等ニ依テ木質環ノ厚薄ヲ異ニス同種ノ樹木ニテモ寒地ニ生スルモノト暖地ニ生スルモノトハ其木質環ノ厚薄ニ大ナル差違アリ又同一ノ樹木ニテモ其年齡ノ多少ニ依リテ環ノ大サヲ異ニス其盛壯ナルト成リタル環ハ老衰シタルト成リタルモノヨリ頗ル厚シ又同一ノ環ニテモ各部其厚サ同シカラズシテ木髓一方ニ偏スルモノ間、之アリ是レ種々ノ原因ヨリ起ルモノナレモ樹木ノ莖幹一方ニ多ク増大スルハ主トシテ其日光ヲ受クルト他ノ一方ヨリ多キニ因ルモノナリ

毎年成ル所ノ木質環即チ年環ノ各、分明ナルハ亦種々ノ原因ヨリ生ス榲、栗等ハ各年環ノ内部ニ大ナル斑紋木管ノ多キガ爲ニ横截面ニ於テハ大ナル孔穴ヲナシ肉眼ヲ以

テ之ヲ見ルヲ得故ニ環ノ外部ノ組織緻密ナル處ト内部ノ孔穴多クシテ組織鬆疎ナル處トハ著シキ差アルヲ以テ各環ノ區域甚ダ明瞭ナリ總テ兩環間ノ區別判然タルハ生長時期ノ終ニ成リタル部即チ環ノ外部ハ其木纖維細小ニシテ其生長時期ノ初ニ成リタル部即チ内部ハ木纖維頗ル大ナルヲ以テナリ且ツ又生長時期ノ終ニ生シタル木纖維ハ内外ノ方向ニ於テ稍、匾平ナリ是レ其生スルニ方リテ壓力ヲ受クルガ故ナルベシ

木質環増加スルノ摸樣上ノ如クナルガ故ニ環數ヲ計リテ樹木ノ年齡ヲ算スルヲ得ルノ理ナリ寒地ノ樹木ハ一年間ニ其生長ノ全ク止ム時アルガ故ニ年環判然タルト多ケレバ之ニ依リテ粗、其年齡ヲ知り得ベシト雖モ暖地ノ樹木ハ其環數ノ不定ナルガ故ニ其齡ヲ知ルト難シ寒地植物ノ年齡ヲ概算スルニ左ノ方法ヲ用フルトアリ樹木莖幹ノ一方ニ孔穴ヲ穿チ其穿面ノ年環ノ數ヲ計リ又反對セル一方ニ同一ナル孔穴ヲ穿チ其年環ノ數ヲ計リ此ノ二數ノ平均數ヲ得又前ニ孔穴ヲ穿チタル處ニテ莖幹ノ直徑ヲ計リ之ヲ二除シテ前ノ平均數ニ乘スベシ例ヘハ右ノ如クシテ深



サ一寸ノ孔穴ニ處ヲ穿ツトセヨ其一ハ年環十ヲ有シ其二  
 ハ年環十六ヲ有セバ則チ一寸毎ニ年環ノ平均數十三ナリ  
 又莖幹ノ直徑一尺五寸トシテ之ヨリ外皮ノ厚サ一寸ヲ減  
 ゼバ一尺四寸ヲ得之ヲ二除シテ七寸ヲ得環ノ平均數十三  
 ヲ乘ゼバ九十一トナル是レ此ノ樹ノ年齡ノ概數ナリ此他  
 方法アレトモ今此ニ記載スルヲ要セス  
 右ニ述フル所ハ概チ皆ナ植物學ノ定論アレトモ最近之ヲ  
 疑フ人アリ米國子ブラスカ州ノエー、エル、チャイルド氏  
 ハ即チ其一人ナリ氏ガ自ラ試驗シタルモノハ一ヲ此ニ舉  
 ゲン西曆千八百七十一年六月ニ紅槭樹ノ種子成熟シテ地  
 ニ落チタルモノヲ播キ千八百七十三年ニ之ヨリ生ジタル  
 幼樹ヲ皆他處ニ移植シタリ千八百八十三年八月ニ至リ其  
 大ニ繁茂シ枝葉相密接シテ互ニ生長ヲ妨碍スルニ至リタ  
 ルヲ以テ其中ノ數株ヲ伐リ除キタリ始メ種子ヲ播シタル  
 時ヨリ此時マデ十一年ニケ月ナリ其伐リ除キタルモノハ  
 中一株ノ截面ニ於テ中心ヨリ一方ニ向ヒ木質環四十ヲ見  
 タリ他ノ一方ニ於テハ環數右ノ如ク判然タラザルモ三十  
 五ヨリ少ナカラズ右ノ木質環四十ノ中十二ハ分明ナレバ

其間ニアルモノハ細クシテ稍々分明ナラス即チ假環ナリ  
 又右十二ノ分明ナルモノハ中九環ハ殊ニ分明ニシテ年環  
 ナルヲ疑ナシ其他ハ何レチ年環トスベキヤ確定シ難シ又  
 チヤイルド氏ハ他人ノ觀察シタルモノヲ掲ケタリ左ノ如  
 シ  
 ヒビグ、ヒコリ樹、年環十一年、分明ナル環數十六  
 グリオン、アシニ樹、年環八年、分明ナル環數十一  
 ケントキ、コヒ樹、年環十年、分明ナル環數十四  
 其他甚ダ不明ナルモノ數二十一、年環不明  
 ボル、オトク樹、年環十年、分明ナル環數二十四  
 プラク、ワルソット樹、年環五年、環數十二  
 内栗、年環五年、分明ナル環數七  
 桃、年環八年、分明ナル環數六  
 チニスノット、オトク樹、年環廿四年、分明ナル環數十八  
 チヤイルド氏ハ土ノ數例ヲ舉ケテ以テ木質環數ハ温帶地  
 方ニ於テモ樹木ノ年齡ヲ知ルノ標準ト爲スニ足ラズト事  
 新シク陳ハ立ツレバ氏ト雖モ樹木ノ年環ト其中間ニ生ス  
 ル木質環即チ氏ガ所謂假環トノ區別ハ固ヨリ了知スル所

ナリ氣候ノ摸樣ニ依テハ假環却テ真正ノ年環ヨリ分明ナ

ルヤト余ハ此ニ疑アリ其「社會」トハ士巴爾答及ヒ北米土



ナリ氣候ノ摸樣ニ依テハ假環却テ真正ノ年環ヨリ分明ナル  
ルヲモアリ又假環ノ數非常ニ多キヲモアレハ假環ト年環  
トハ分別シ得ルヲ多シ又氣象表ニ依ルニチブラスカ州ノ  
如キハ氣候頗ル不順ノ地ナレバ樹木ノ環數ニ依テ其年齡  
ヲ定ムルヲ或ハ難カラシ然レハ氣候順良ナル地ニ於テハ  
少シク注意ヲ加フレバ環數ニ依テ樹齡ヲ概算スルヲ得ベ  
シ但シ精密ニ之ヲ知ル能ハサルハ論ヲ俟タズ

日本ニ於テハ未タ此事ニ就キテ試験シタルコアルヲ聞カ  
ス之ヲ爲スハ難事ニ非ザレハ年月ヲ積マザレバ能ハズ種  
子ヲ播植スルノ後毎日溫度ノ高低兩極及ヒ平均數并ニ雨  
量等ヲ細記シテ後日成長シタル樹木ノ截面ヲ檢スル時ノ  
參考ニ供セザル可ラズ斯クシテ年々ニ生スル所ノ環數ノ  
ミナラズ其厚薄、造構、組織、堅軟等ヲ諸種ノ樹木ニ就キ  
テ實驗セバ之ニ依テ發明スル所果シテ多カラン

加藤弘之先生ニ質ス

三宅雄二郎

先生コノゴロ黒科耳氏ノ人爲淘汰ノ說ニ付テ二問ヲ出シ  
第一問ニ曰フ「著者カ士巴爾答及ヒ北米土人部落ノ人爲  
淘汰ヲ以テ實ニ社會ヲ利セリトスルハ當レリヤ將當ラサ

ルヤ」ト余ハ此ニ疑アリ其「社會」トハ士巴爾答及ヒ北米土  
人部落ノ如キ兵力ノミヲ貴フ社會ヲ指シテ云ヘルカ又ハ  
宇内諸種ノ社會ヲ總シテ云ヘルカ若シ兵力ノミヲ貴フ社  
會ヲ指スナレハ先生ノ問ハ上古ノ國民ト僻地ノ蠻民トノ  
世態ヲ推考スルニ要用ニシテ兵力ノミナラス文化ヲモ貴  
フ今日ノ世界ニ關係セストシテ可ナルヘシ先生豈之ヲ愉  
快ト思ヒ玉フカ若シ諸種ノ社會ヲ總シテ云ヘルナレハ社  
會ヲ利セリトハ社會ノ何ヲ利スルコカ諸般ノ事物ヲ利  
スルノ謂カ現ニ支那人ノ如ク父子有親ヲ人倫ノ第一トス  
ルニ矛盾スレハ固ヨリ然ラスト答ヘサル能ハス然ラハ文  
物技藝ヲ利スルカ殖産貿易ヲ利スルカ宗教ヲ利スルカ政  
治ヲ利スルカ抑モ筋骨ヲ逞クシテ戰爭ニ勝ヲ博スルニ利  
アルカニニ利アリテ一ニ害アル事ハ社會ニ利アリトス「社  
會ヲ利セリトハ社會組織ノ原素ノ多數ヲ利スルコナラ  
ンニハ人ノ議論スルニ不都合ナケレハ或ハ過テ少數ヲ利  
スルコヲ社會ニ利アリトセラレタルニアラサルカ先生ノ  
斷言アラソコヲ乞フ凡ソ人ハ偏ヨリ偏ニ流レ易キカ故ニ  
一ニ利アリテニニ害アル事モ其一ノ利ヲ舉テ稱揚スルコ



アルハ毫モ咎ムヘキニアラス唯タ稱揚ノアマリ害ノ多キヲ忘レテ施行セントスルニ及ヘハ疾呼シテ非ヲ唱ヘサルヲ得ス黒科耳氏ハ羸弱ノ生兒ヲ殺スヨリ人民ノ筋骨ヲ逞クシタルヲ稱揚スレモ稱揚ノアマリ他ノ狀勢ヲ顧ミスシテ吾人宜ク羸弱ノ生兒ヲ殺スヘシト言フニ至ラサレハ咎ムヘカラサル様ニ見ユルナリ先生ノ氏ノ説ヲ「當レリトセラレハ諸君ハ果シテ殺兒ヲ美事トシ玉フヤ」ト恐ロシゲニ曰ハレタルハ如何ナル道理ニ基カレタルカ問題ハ明瞭ノ説明アルニ非サレハ是非ニ付テ議論百出スルモ盡ク水掛ケ論トナリテ泡ト共ニ無益ニ歸スルナリ余淺學ト雖モ安ソ質問ヒサルヲ得ンヤ

套言譯語

○東京化學會譯語議決 (第六)

- P Periodic Law 循環律
- P Pharmaceutical Chemistry 製藥化學
- P Physiological Chemistry 生理化學
- P Precipitant 生澱藥

- Precipitate 沈澱
- Preparation 製方。製品
- Product, bye 傍成物
- Proportion, definite 定比率
- „ „, Equivalent 當適比率
- „ „, multiple 倍數比率
- Purification 精製
- Putrefaction 腐敗
- Pyrophorus 白燃藥
- Q 支那入ノ漢文ノ...
- Quaration 四分一方
- R Radical 根分
- „ „, simple 單根
- „ „, compound 複根
- Reaction 反應
- Reagent 試藥
- Rearrangement 構造變化

Rectification

精製

ニテ烹轉シ肉羹ニテ薄ク延ヘ鹽、胡椒ヲ入レ弱火ニテ一



Rectification

精溜

Reducing agent

還元劑

Reduction

脫酸。還元

Refining

精鍊

Residue

殘物

Resin

樹脂

Rotating power

旋光力

S

Saccharimetry

糖分定量法

Salt

鹽

Sample

試料

Sanitary chemistry

衛生化學

(以下次號)

雜錄

○素徒西洋料理法第二回

汲々夫

第一味

(伊太利亞肉羹) 生ノ馬鈴芋、蕪大根、人參、葱、「キャベツ」ノ白葉、セレリ、旱芹菜、(又ハ並ノ芹)等ヲ細ク切り牛酪

ニテ烹轉シ肉羹ニテ薄ク延ヘ鹽、胡椒ヲ入レ弱火ニテ一

時間程緩々烹詰メベシ○肉羹ナキハ湯ニテ延スモヨシ

○又肉類ノ切ヲ入ル、モヨシ

第二味

(揚ケ肴) 肴ヲ善ク洗ヒ鹽ト胡椒ヲ振り掛ケ温飽粉ヲ付

ケ其上ニ玉子ノ黄身ヲ塗り又其上ヲ麵包粉ニテ包ミ牛酪

ニテ揚ゲベシ○並ノ西洋料理ニ於テハ多クハ牛酪ノ代リ

ニ豚脂或ハ胡麻油等ヲ用フ故ニ其味美ナラス○麵包粉ハ

古キ乾キタル(或ハ乾カシタル)麵包ヲ山葵下ニテ擦リ下

シ作ルベシ

第三味

(肉入キャベツ)「キャベツ」ヲ入用丈ケ善ク洗ヒ烹立チタ

ル湯ニテ粗ト湯デ取り出シテ水ニ漬ケ置キ○生或ハ烹タ

ル肉ヲ庖丁ニテ細ク敲キ切り鹽及ヒ胡椒ヲ少シ交ゼ○麵

包ノ和カナル処ヲ水ニ浸シテ絞リ上ケ右ノ肉ト交セ合セ

玉子ノ黄身ヲ少シ加ヘ手ニテ丸ク固メ之ヲ「キャベツ」ノ

葉ニテ五六層卷キテ「キャベツ」ノ玉ノ形ヲ作り糸ニテ縛

リ肉羹ヲ以テ一時間程烹ルベシ○食スル時ニハ糸ヲ取り



去ルヘシ

(温飩粉汁) 牛酪一ヒヲ溶カシオキ温飩粉半ヒヲ其中ニ  
テ茶色ニ焦カシ攪廻シナカラ肉羹ヲ注キ泥的ニシ鹽、胡  
椒ヲ交ヘテ少シ烹ルヘシ○此汁ハ羹肉ニ用ヒテ宜シ

第四味

(酒或ハ醋漬ケ肉) 獸肉或ハ鳥肉ノ善キ処ヲ洗ヒ鹽胡椒  
ヲ擦リ付ケ壺ニ入レ肉ヲ越ス程葡萄酒或ハ西洋ノ醋(日  
本ノ酒或ハ醋ニテモヨシ)ヲ注キ肉桂ノ葉、人參、葱、桃子、  
肉豆蔻(セーヂ)「タイム」ヲ少シ宛加ヘ善ク蓋ヲシテ冷カ  
ナル処ニ置キ漬ケテヨリ三日乃至二週間内ニ用フヘシ  
○食スル時ニハ肉ヲ出タシ善ク洗ヒ牛酪ヲ溶カシタル鍋  
ノ中ニテ廻リノ焦ル程燻キ漬ケ汁ト藥味トヲ其儘鍋ニ入  
レ湯ヲ少シ加ヘ弱火ニテ二時間餘リ緩々烹詰メ肉ヲ取り  
出シ汁ヲ漉シ人參ト葱ヲ攪リ漉シタル汁ノ中ヘ入レ肉ニ  
掛ケテ食スヘシ○暑中ニハ右藥味ノ内生ノ野菜ヲ省クヘシ  
(▼ヨチーヌ汁用サラド)「サラド」或ハ米利堅菜「チシヤ」  
菜、三葉ノ類ニ左ノ汁ヲ掛ケテ食スヘシ  
玉子ノ黃身一個ニ芥子、砂糖各半小ヒ、鹽、胡椒少シ宛ヲ交

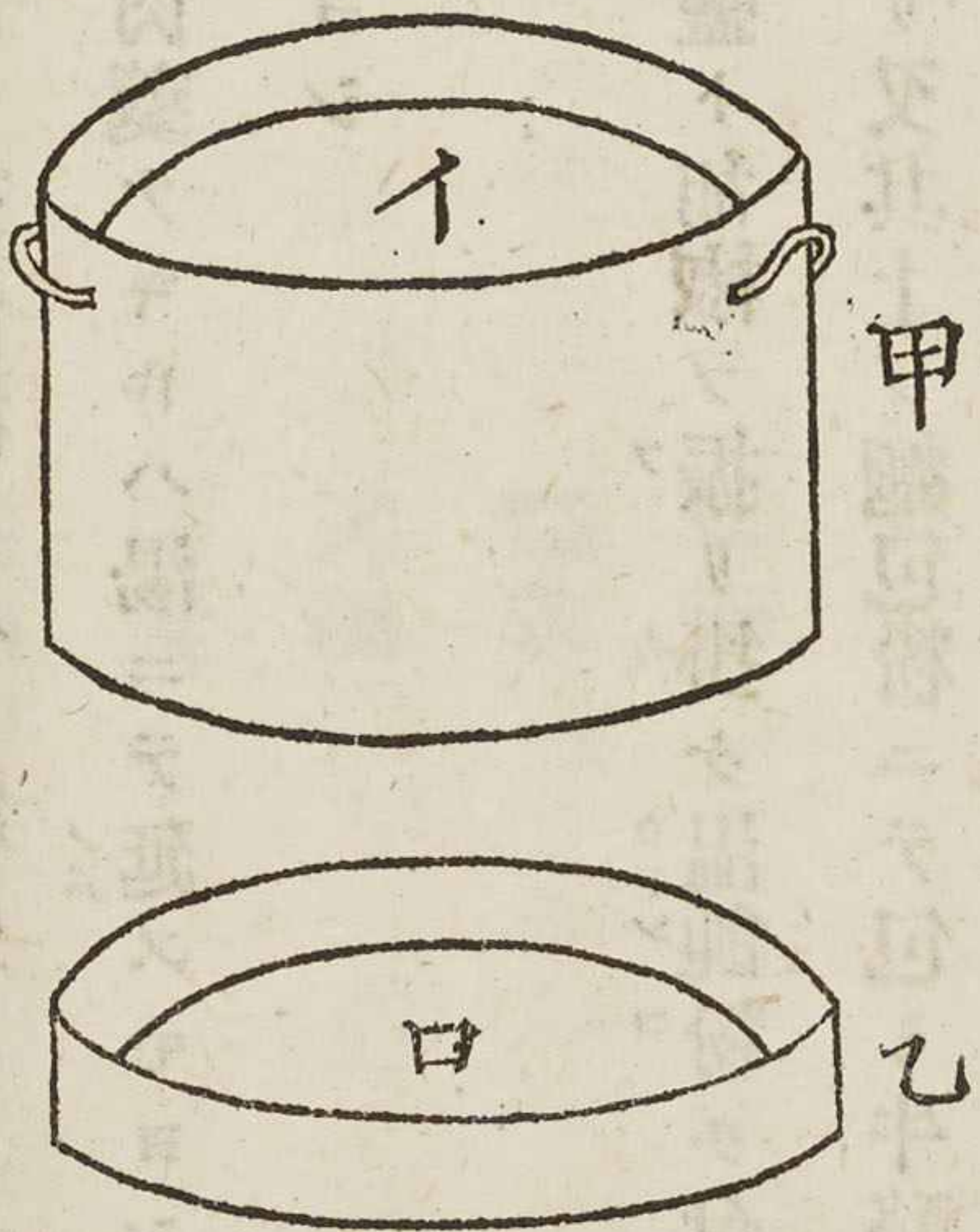
セ合セ「サラド」油二小ヒヲ一滴ツ、垂シナカラ固ラヌ様  
ニ善ク攪廻シ醋ニテ泥的ニ溶キ菜ニ掛ケテ交セ合スヘシ  
○「マヨチーヌ」汁ハ總テ肉魚等ノ冷タキ者ニ用ヒテ宜  
シ

後口

(麵包ノ乳烹) 麵包ノ和キ処八半斤(一斤ノ八分ノ一)ヲ  
水ニテ和ラゲ固ク絞リ井ニ入レ牛乳一合玉子一個砂糖三  
杯程混交シ井ヲ水湯中ニ入レ蒸箱(又「テンパン」ト云フ)ニ  
テ蒸シ暖キ中ニ食スヘシ  
(晚餐終)

蒸箱(テンパン)

圖中甲乙ハ共ニ厚キ延金製ノ圓筒ナリ甲ハ直徑少シ小ニ  
シテ乙中ニ入ル、コヲ得ヘシ甲ノ上部ニ「イ」ナル天井ア  
リ乙ニハ「ロ」ナル底アリ肉  
類魚類或ハ菓子等ヲ蒸ス  
ニハ乙ヲ火上ニ置キ其上  
ニ蒸スヘキ品ヲ載セタル  
皿ヲ置キ甲ヲ以テ之ヲ蔽  
ヒ「イ」上ニ灰及ヒ炭火ヲ載





スルナリ○甲箱ノ大サハ通常直徑一尺高サ六寸位ニテ可  
ナリ大小二個ノ蒸箱ヲ備ヘ置ハ最モ便利ナリ○大魚ヲ蒸  
スニハ長形ノ蒸箱ヲ便利トス又火爐ノ形次第ニテ四角形  
ノ蒸箱ヲ作ルモヨシ

かんたんなる おつりの ーけん、

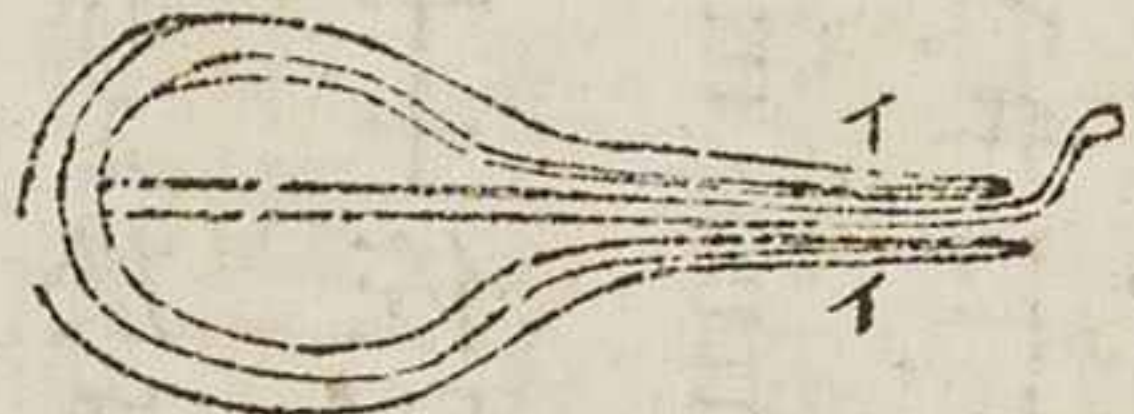
ごどれ まきた、

とけん の 一、 なみの はさみ おひらい  
て ゆるく なし これ おもの に うちつけて  
ふるわせ まへもつて ひらたき さらに もりたる  
すいぎん に ろの ふたつ の とがり た ふれ  
させる とき わ すいぎん の めんに きれい  
なる なみの もよれ が できる なり、  
とけん の 二、 はんしれ よつかり に なし  
ひ にて よく あぶり つくは の うに おき  
その うに に つめの ひら にて つよく お  
して もじ お かき まじもつて つくは の うに  
に ちらして おきたる たをま の こに その  
もじ お かきたる めん お ちかづける とき わ

たばこの こが かみよ つきて もじが あ  
らわれる なり、

とけん の 三、 いまわ はやらぬども いぜん

はやりたる びやぼん という おもちや あり、づ



の ごとし、 その りよおほおの う  
で（イイ）お うわを と ーたばに  
あて なるたけ くちね すぼめ ゆび  
よて まんなかの はじき お はじき  
ならしながら あゑ お ださず また  
くちびる も うごかさず ただ したのみ お う  
ごかして 「なんみよおほおれんげにきよお」 またわ  
「れんころこゆ せんたり まとおぎ そわか」 など  
と いいながら いきお つよく だしいれする と  
きわ びやぼん が その とたりもの れ いう  
なり、

學會記事

○東京化學會記事 明治十七年二月十六日午後一時ヨリ  
例場ニ會ス、萬年會ヨリ同會報告第五輯第十一號ヲ、會員



高松豐吉氏ヨリ客年十一月刊行ノ「ゼ、ヂョルナル、オフ、ゼ、

ソサイエテ<sup>井</sup>、オフ、ケミカルインダストリー」ヲ本會へ

寄贈セラレタリ本會規則ノ改正案ヲ議ス「次ニ河喜多能

達氏雷藥構造ノ説ヲ演ス」此日出席會員十八名ナリ

同三月一日午後一時ヨリ例場ニ於テ臨時會ヲ開キ規則改

正案前會ノ續テ議ス「本日ハ出席正員ノ數十三名ニシテ

過半數ニ充タザレモ出席正員中修正案ヲ送り又原案賛成

ノ意ヲ表シタル者少カラサレバ出席正員ノ決議ニヨリ議

會ヲ開ク

○東京生物學會 明治十七年一月十九日(第三土曜日)午

后第二時ヨリ東京大學三學部ニ於テ通常會ヲ開ク會員二

十名出席幹事前會ノ記事ヲ朗讀シ終テ松原新之助氏ニハ

タラ種族中奇魚ノ發見岡田信利氏ニハ朝鮮人ノ髑髏佐々

木忠次郎氏ニハカヒコ寄生蟲ノ實驗ニ付キ演説セラレ第

五時ニ閉會ス

明治十七年二月十六日(第三土曜日)午后第二時ヨリ東京

大學三學部ニ於テ通常會ヲ開ク會員十八名出席幹事前會

ノ記事ヲ朗讀シ終テ石川千代松氏ニハ河鰈發生ノ説岩川

友次郎氏ニハ昆蟲ノ利害ニ就キ演説セラレ午後第五時ニ  
閉會ス

東京植物學會記事 明治十六年十二月廿二日東京大學植

物園ニ於テ植物學會を開キ伊藤圭介氏は人參の説江沼元

五郎氏ニ朝鮮紀行を話せられ明治十七年一月廿六日例場

ニ於テ例會を開キ大久保三郎氏は木質年理の事をポピユ

ラル、サイエンス、モンツリ<sup>ニ</sup>より抄譯して本邦産の木材

標品を示し澤田駒次郎氏は胡蘿蔔<sup>ニ</sup>の説松村任三氏は紀州

和州邊植物採集紀行並に<sup>ニ</sup> *Humulus* スル一小草ナリ矢田

部長吉氏近ク其圖説ヲ某<sup>ニ</sup>は矢田部氏明治十三年武州白子

雜誌ニ出サル、ナルベシ 驛ニ於テ發見せし所なるが高知縣の人牧野富太郎氏も去

年土佐國高岡郡佐川村に於テ發見せるよしと報じ又 *Humulus*

*conditum* (ヨレハユリ)の花辦は英國の村民之をブラ

ンデー中ニ浸し貯へ置きて毀傷を治するに用ひ甚其功能

を稱すと英國園藝雜報中ニ記載したるが本邦も如此例

あるやを會員に質され二月廿三日例會を開キ松村任三氏

は秦皮の説澤田駒次郎氏は山茶科炭<sup>ニ</sup>の説並に櫟と枹と薪

として孰れか優れるの説を話せられ小西信八氏ハ鳳尾松<sup>ニ</sup>

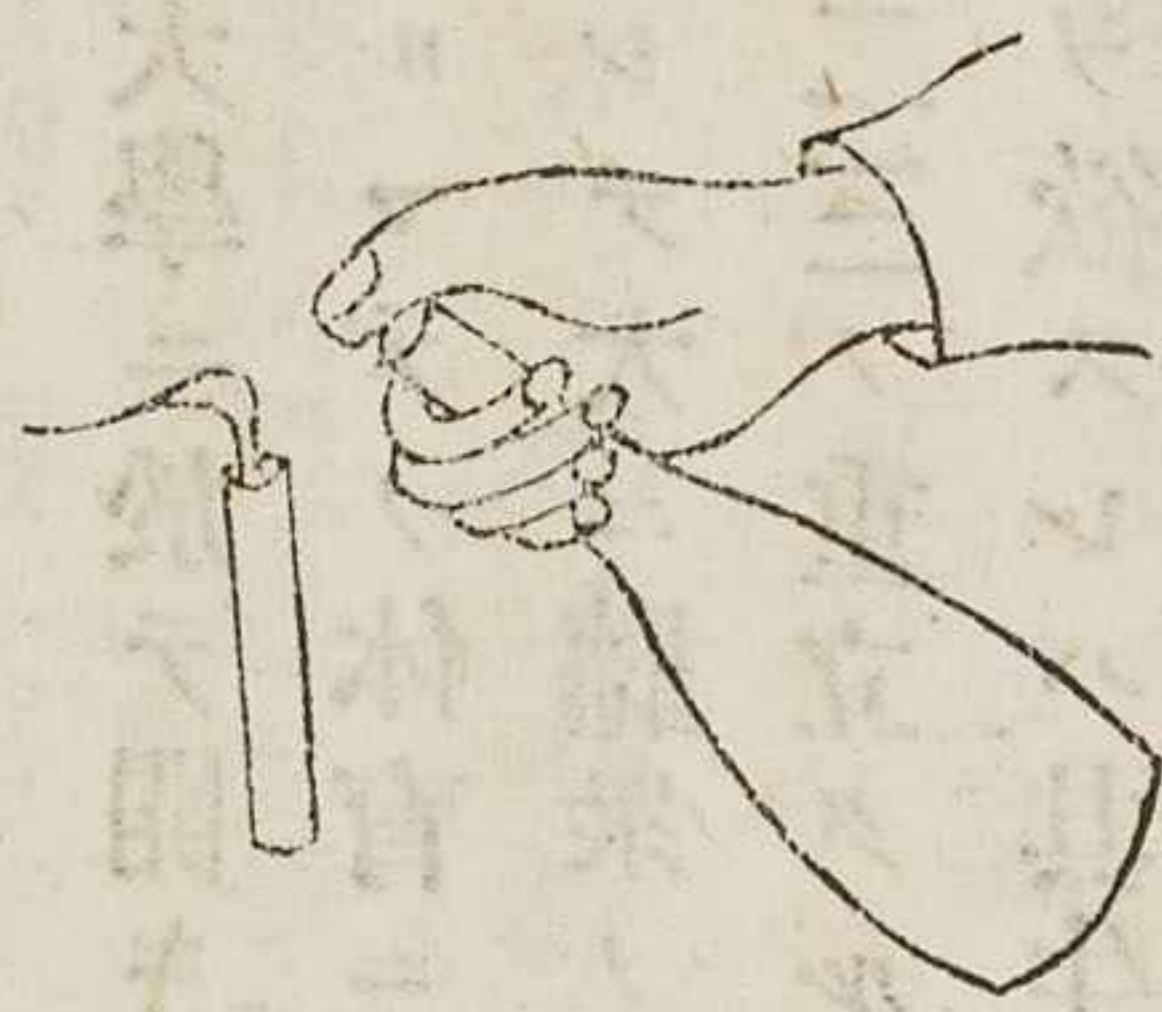


挺幹の縦截せる標品と示されたり

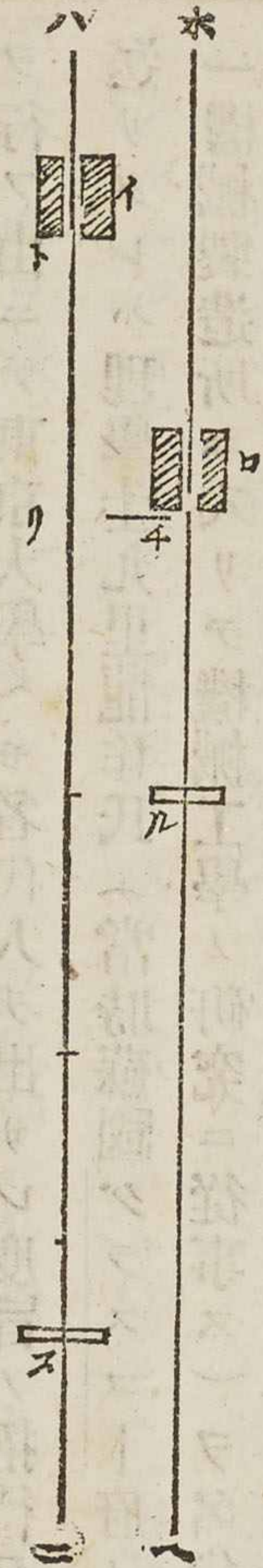
雜 報

○單一ノ物理試験 大ナル德利ノ口

ヲ右手ノ拇ニテ(德利ノ口大ナルハ  
掌ヲ以テ)半分閉チ嚴シク息ヲ吹込  
ミ急ニ之ヲ塞キ燭火ノ傍ニ於テ之ヲ  
開ケハ火忽チ消滅ス(ラ、ナチニ  
ル)



○落下試験新法 圖中「イ」及「ロ」ハ中間ニ孔ヲ穿テル鎮  
鏢ノ圓壻ナリ「ハ」「ホ」「ハ」ハ圓壻ノ沿フテ落下スヘキ垂直  
ニ張リタル針金ナリ「トリ」「ハ」「チル」ニ均シク「トス」「ハ」「チル」



ニ四倍ス「ス」及「ヒ」ルハ支臺ナリ試験ノ始メニ當リ先ツ  
「チ」ヲ以テ「ロ」ヲ輕ク支ヘ置キ「イ」「チ」「ト」ノ処ヨリ落スルハ  
「チ」爲メニ排除セラレテ「ロ」モ亦落下ス而シテ「イ」「ノ」「ス」ニ  
達スルノ時「ロ」正ニ「ル」ニ到ルヲ視ルヘシ(獨逸器械新聞)

○女學生 瑞西國チューリヒ大學ニ於テハ現今三十一人  
ノ女學生アリ乃チ醫學學生二十人哲學學生十人化學學生一人ニ  
シテ其内獨逸人ハ僅ニ七人ナリチューリヒ大學ニ於テハ

修學上總テ男女權ヲ異ニスルコトナシ千八百七十三年ヨリ  
八十三年迄十ケ年間ニ女學生ニシテ博士ノ稱號ヲ得タル  
者三十人其内二十三人ハ醫學博士七人ハ哲學博士ナリ  
(獨逸繪入新聞)

○植物名彙 頃日東京大學助教松村任三氏は日本植物  
名彙と云へる書を著されたるが此書は日本植物の學術上  
の名稱即ち羅馬名と「ア、ベ、セ」順ニ排列し和名漢名並に  
科名をも加へ且羅馬文字にて和名を附し又卷末には和名  
漢名及び羅馬文字の見出しもあれば我邦人ハ勿論外國人  
にも甚便利ならん松村氏の多年植物學を研究して殊ニ分  
類學に長するハ世人の既に知る所なるに此書は氏が常に  
大學理學部の植物學實驗場に在りて夥多の標品及び歐洲  
より新齋の諸書に就きて自ら檢したる上著されたるもの  
なれば其確實なること之に過るものなからん此書の閱者  
東京大學教授矢田部長吉氏は羅馬文字にて緒言を書かれ  
著者松村氏は假名にて序文を綴られたり亦奇と云  
ふべし

○學士ノ榮譽 先年東京大學理學部生物學科ヲ卒業シ獨  
國へ留學ヲ命セラレタル理學士飯島魁氏ハ一千八百八十  
二年ノ春ライプシヒ大學校ニ入り教授ロイカルト氏ニ就  
キテ尙同學科ヲ攻メ居ラレタルカ今度淡水「プ」ヲチリヤ  
ンス」ノ發生ヲ研究シテ同大學校ヨリ金賞牌ヲ授與セラ  
レタリト又醫學士小金井長精氏ハ近頃ベルリン府大學校



ニ於テ解剖學教授ワルザイル氏ノ第二助教授ト爲ラレタ  
 リ此地位ヲ希望スル人ハ頗多クシテ容易ニ得可キモノニ  
 非ラサル由吾邦人ノ海外ニ於テ斯ル榮譽ヲ得ラレタルハ  
 吾邦ノ爲ニ實ニ欣ク可キトニシテ東京大學ニ取リテハ此  
 上モナキ面目ニコソ

○エデンポロ―大學校 同校ハ今年ニテ其創立以來三百  
 年ヲ完了シタルヲ以テ四月十五十六十七ノ三日間祝ノ式  
 ヲ行フ由ニテ東京大學ヘモ名代人ヲ出サレ度旨ノ招待ヲ  
 送リタレハ理學士九里龍作氏(當時蘇國グラスコー―府ノ  
 一機械製造所ニ入りテ機械工學ノ研究ニ從事ス)ヲ名代  
 人トシテ列席セシムル旨回答セラレタリ

○河豚毒 大學醫學部生理學教授大澤謙二君ハ河豚ノ毒  
 ノ事ヲ研究シ居ラル、由右完了セラレ、ニ於テ大ニ世ニ  
 益スル所有ル可シ

○ベルツ氏演說 同氏ハ去ル九日東京大學ニ於テ開キタ  
 ル大日本教育會ニ於テ小兒ノ學齡ニ至ルマテノ体育ニ付  
 テ演說ヲ爲サレタリ其所說ハ甚適切ニシテ大ニ聽衆ノ感  
 覺ヲ惹起シタルカ如シ今其示サレタル二三ノ重立タル件  
 ナ掲ケントス凡ソ小兒ノ健全ナラントコトヲ欲スレハ其生レ  
 タル後ニ於テ心配スルハ己ニ遲シ兩親ハ平生善ク衛生ノ  
 法ヲ遵リ就中運動ヲ善クシ清鮮ノ空氣ヲ吸ヒ以テ自己ノ  
 身體ノ健康ナルヲ勉メサル可カラス小兒ノ生レタル後ハ  
 其母ノ乳ヲ以テ養育スルヲ最宜シトス若シ己ヲ得ス乳母

ヲ置ク時ハ乳母ハ小兒ヲ自分ノ兒ノ如ク愛シ小兒モ亦之  
 ヲ母ト同視スル様ニス可シ西洋ニテハ早ク乳ヲ離スノ習  
 慣ナレト小兒ノ爲ニハ久シク乳ヲ飲マシムルモ害ナシ之  
 ヲ離スルハ却テ小兒「コレラ」ト稱スル病ニ罹リ易キノ恐  
 有リ然レト其母ノ爲ニ餘リ宜シカラス且齒ノ生ルハ其乳  
 ヲ離ル可キ天然ノ指示ナルカ如シ小兒ハ可成身體ヲ働カ  
 シム可シ無理ニ式法ヲ教ヘ唯大人シキ様ニス可カラス小  
 兒ハ成ル丈ケ活潑ナル可シ又衣服<sup>オトナ</sup>モ成ル可ク輕クシ胸ノ  
 邊ヲ紐ナドニテ固ク縛ルコトハ甚タ惡シ日本ノ氣候ハ四季  
 共ニ溫和ナレハ成ル可ク外ニ出テ清鮮ノ空氣ヲ吸ハシム  
 可シ成ル丈ケ懷キタリ負タリセシテ其手足ヲ用井シム  
 ルカ宜シ其他ニモ種々有用ノ事有リ且面白キ例ヲ舉ケテ  
 說明サレタレト此ニ唯重要ノ事ノミ記憶ノマ、斯クハ物  
 シツ

○詩人 英國ノ有名ナル詩人テニソンハ先頃特旨ヲ以テ  
 貴族ニ列セラレタリ佛國タン新聞記者ハ大ニ之ヲ賞賛シ  
 文人學者ヲ待ツコト當ニスノ如クナル可シト論シ此点ニ付  
 テハ佛ノ英ニ及ハサルヲ嘆セリ

○萬國衛生及教育博覽會 本年六月英國ロンドン府ニ於  
 テ題號ノ博覽會ヲ開キ衣食住及教育ニ關スル物品ヲ集ム  
 ル由又之ニ關シタル事項ヲ討議スル爲メ七月中ニ集會ヲ  
 開ク筈ナリト本邦ヨリモ出品セラル、由ナリ願クハ昨年  
 ノ水産博覽會ノ時ヨリモ好評ヲ得タキモノナリ